

# 井伏鱒二における文学的自己定位

—文学青年・「私」・プロレタリア文学—

前田 貞 昭

## はじめに

自己を語るのではなく、他者との距離を意識しながら、しかし、その他の物語を語る作家として井伏鱒二は存在して来た。井伏は、自己の内面を探求したり、自己の内部に取り立てて語るべきものを発見することはひとまず措いて、ひとまず措いたがゆえに出来たその空洞を、他者の物語によって満たして行ったといつてよいように思われる。

自己告白を近代文学成立の要件と見なせば、こうした自己告白を排除する井伏の姿勢が、日本近代文学の歴史において、彼の文学にきわめて特異な位置を与えたわけである。勿論、井伏も最初からそうした位置を定めていたわけではない。が、「雞肋集」(一九三六年五月—二月)を見ても、あるいはそれを補うべき「平生記」(一九七〇年—一月—二月)を読んでも、その辺りの文学的自己定位の問題は、容易に姿を見せようとはしない。自己のスタンスに固執することに頑強であるにもかかわらず(井伏の左傾拒否は余りにも有名である)、その文

学的理路に関して、井伏は多く語ろうとしないのである。

それは、自己告白を退けた井伏の文学的姿勢からすれば当然であるかもしれないのだが、むしろ、豊富に語れるほどの内実が井伏にあったのか、私には疑問に思われる。井伏の場合、新しい文学的理念やかれ固有の問題を抱えて作家の道を選んだというより、「文学」が一種の絶対的価値として措定されたことが、井伏に作家への道を選ばせてしまったのではなからうか(1)。その結果、「文学」という器は用意されはしても、そこに何を盛るべきかという課題については、その後で考慮されるべきものであったようにすら想像されるのである。だから、この辺りの事情は、誇るべき筋合いのものではなくて、何とか作家としての道をつけようとした井伏にとっては秘事の領域に属する實のものであったのではあるまいか。三〇代にまで及ぶ習作時代の長さは、「文学」を選んでしまった井伏の苦悶の深さを物語っているようですらある。そして、その習作時代の末に井伏が獲得したものは、前世代の大正期私小説作家のように「私」を信じることはできないけれども、かれらからは「文学」への信仰という遺産を受け継いだ、井伏なりの文学的スタイルであったように思われる。

現在の時点から井伏文学を振り返ってみれば、井伏は、「私」に語られるべき(読まれるべき)価値を有することを疑わずに「私」にのみ関心を集中するのでもなく、また、手慣れた情緒や物語性の中に「私」を解消させることもしていない。大正期私小説作家や大衆文学作家が自分が作家であることに懷疑を抱かないという意味において随分と鈍感であったとすれば、井伏は、作家であることの居心地の悪さを明瞭に意識しながら、しかし、自分は作家でしかありえないという地点において、文学に携わったように思われる。

井伏のそういう態度を窺わせる恰好のエッセイがある。「早魃地帯」(『読売新聞』朝刊一九三〇年七月二七日)である。

谷川の水が干からび、田の稲が黒くなって枯れ、人々が結束して雨の降りますやうに龍神様の石像を礼拝してゐるとき、かつて私は田舎へ帰つたことがある。私は人々の集まつてゐる、往還の広場を通らなければならなかつた。谷間の往還は一本みちである。そのとき私は、こんなつらいことはなかつたのである。(略)私はそこを通りすぎながら人々の合唱が一段たかくきこえたとき、私は心のなかで自分自身に「アウト!」といつて叫んだ。

井伏は、早魃に苦しんで神頼みせざるをえない、窮迫した村人の心情に一挙に同化してみせるのではない。井伏は、雨乞いをする村人に対しては他所者でしかない自分の位置を明瞭に意識する。それが、「自分自身に『アウト!』といつて叫ぶことである。ここに働いているのは、井伏自身を相対化して捉える他者との距離の意識であり、それ

が直ちに村落共同体の内部から自らを他所者として見据える目に転化する。もし、村人たちを「大衆」と読み替えることができるならば、井伏の「私」は、「大衆」と同化することなく、そこに越え難い距離を見てしまうのである。

つまり、井伏文学を大衆文学と隔てている要因は、大衆文学作家が所謂「大衆」と作家の自我とを重ね合わせて見たのに対して、井伏は、「大衆」を自己と異質な他者として捉え得たところにあると思われる。他者に向かった井伏の視線は、そのまま反射されて、他者と同一化されえない位置にある自己を捉える。

では、私小説作家のように陶酔的に自己を語らず、かといって大衆文学作家のように自己を消滅させて大衆と同一化したと錯覚するのではない井伏においては、どのような物語を語ることが可能であったのだろうか。

井伏文学においては、それまで安住していた秩序の総体を歪められ危機に瀕したとき、ようやく、主人公(作中人物)たちがそのような場に追いやられた経緯についての物語が語り始められる。裏返していえば、かれらは、物語を語ろうとする内的衝迫を自分の内部に予め持っていたわけではない。井伏文学の内法に沿っていうならば、そうした剰余物を必要としない状態の中で不自由なくかれらは生きていたのである。作品の主人公(作中人物)たちは、秩序の中に安住することを欲しているのだが、大は戦争・内乱・自然災害から小は都市や農村の常凡人間関係の葛藤まで、作品に起こる災厄や事件にやむなく巻き込まれてしまう。何かが起こるとすれば、それは、主人公(作中人物)たちの内部に起こるのではなく、その外側に起こり、そして、かれらを巻

き込んで行くのである。ある事件の発生によって、それまでの均衡状態・安定状態が崩壊し、そして、その崩壊を前に右往左往する者たちがつまらば井伏の題材となるのである。

逆にいえば、自身の内部に変革を要求するような情念や思想や理念が形成され、自分たちを取り囲む環境(社会的・自然的)を改変すべく主体的に戦いを挑むという物語は、井伏文学にはほとんど見られない。その意味で、主人公(作中人物)たちの状況に対する主体的関与の可能性は予め奪われている。これは、危機の中にあつて、秩序の回復を願うにしても、あくまでも、かれらが旧秩序の回復・復元を願うのと表裏一体の関係にある。なぜなら、かれらが自ら均衡状態を崩したのではない以上、慣れ親しんできた過去の秩序の回復を望むほかに術はないからである。前近代的な共同体の秩序との緊張関係の中に近代的自我なるものが成立するとすれば、右に述べたような理由で、井伏文学には、共同体の枠から突出しようとする近代的な個人は描かれぬ。井伏作品の主人公(作中人物)たちが保守的なエートスに従って生きてゐるのは、こうした発想基盤の上に、井伏文学が成立しているからである。後述するように井伏文学がプロレタリア文学に近接した要素を持ちながらも、それと一線を画する最大の要因はここにあるということが出来るだろう。

## 二

井伏は、出発からほぼ一九二九年に至るまでの間、後の井伏文学とは違って、都会生活の中で支えを持たないままに行き暮れる「私」の

物語を書き続ける。「幽閉」(一九二三年七月)や「借衣」(一九二三年八月)、「夜更と梅の花」(『鉄槌』一九二五年)、『文芸都市』一九二八年三月)、「埋憂記」(一九二七年九月)などには、鬱屈する井伏の内面風景がもつぱら出現する。作中に登場する「私」は、「日雇ひの校正係」(「夜更と梅の花」)、「埋憂記」(「新香書林校正係」)、「たま虫を見る」(『文学界』一九二六年一月)、『三田文学』一九二八年五月)、「無職」(「遅い訪問」一九二八年七月)である。早稲田大学を中退に追い込まれるとほとんど同時に、親友・青木南八を失い、出版社に勤めてみれば失敗を重ねて入退社を繰り返すという井伏の、行き場のない境遇に重ねられるように、これらの作品の主人公の「私」の境遇は選り取られている。

これらの作品に登場する主人公は、多くの場合、文学青年らしいのだが、かれがどのような夢を文学に抱いているのかは判然としない。都会の文学青年の暮らしに疲れた主人公が登場し、貧しく恵まれない「文学青年の暮らし」というものは描かれる。しかし、「文学青年」というものの内実を保障する記述は作中には皆無である。「文学青年」というポーズに溺れた「文学青年」がいて、その文学青年が、失意のままに、何ほどのことも実現出来ずに、ただ、茫洋と日を送る内に、誰かに出会い、何かの事件に巻き込まれるという物語なのである。よくいえば、「くったく」であるが、「くったく」ということは仮面を剥いでみれば、そこに見えるのは、茫漠とした「文学」という「神」への信仰によって生きてはいるが、その「神」の顔を発見できずにいる、無為徒食の徒の面貌である。都会の暮らしに疲れたこれらの文学青年から「文学」という「神」を奪ってしまえば、ようやく保ち得て

いるアイデンティティは簡単に崩壊する。「文学」という神を奪ってしまえば、自己否定しか待ち受けていない上に、「文学青年」の内実には恐ろしいほどに空虚なのである。「埋憂記」の「私」は、失業中の青年である在竹小一郎と置換可能であるし、また、「夜更と梅の花」の村山十吉は、同様に、幻覚の中では「私」の姿でもあり得た。逆にいえば、「私」が文学青年である必然性は、作中において全く欠如している。おそらく、作中の「私」は、かれを陰の部分で支えている筈の文学という自恃を取り去ってみれば、何程も残らない都会の行き暮れた失業者か失業予備青年でしかない。

こうした進路を見失った者の嘆きと不遇のテーマは、随筆類においても同様に表でられるものであった。たとえば一九二七年までの井伏の随筆類の主な発表舞台となった随筆雑誌『桂月』に掲載された延べ一一編の井伏文を見ると(2)、「何しろ私は自分の青年時代がこんなに失意だらけのものであるとは予想できなかつたので、いちいち面食らつてゐるだけなのだ」(「田園、電車等」一九二七年七月)といった、自己の不遇と貧困との嘆きがほとんどを占めるのである。

もちろん、「岬の風景」(『陣痛時代』二号・一九二六年)、『鷺の巢』(一九二六年八月)や「鯉」(『桂月』一九二六年九月、『三田文学』一九二八年二月)、「山椒魚」(一九二九年五月)には、そういう鬱屈して屈託に沈む「私」の姿が描かれるだけでなく、そこからの脱出の方向が示唆されてもいる。たとえば、「岬の風景」においては、鬱屈した心象風景の象徴であった夜更けの「赤い月」のイメージに代えて、昼間の「虹」が登場するし(3)、「鯉」は南八の呪縛からの解放の物語と読める。「山椒魚」は、自己と自己を取り巻く現実をとりあえ

ず是認するところへ行き着く。しかし、それらは、あくまでもほのかに脱出の方向というにとどまっているのであって、井伏は、そこから具体的な脱却の道筋を発見するには至っていないかっただけであらう。

井伏自身は、著名な作家の名前を騙って、カフェに出入りする文学青年たちの姿を文壇ゴシップ風に何度か描いているが(「或る統計」、『福岡日日新聞』朝刊一九二八年二月一三日・二〇日)。「贗ゴシップ」萬西善蔵氏に就いて、「春陽堂月報」一九二九年八月。「挿話な挿話」谷崎精二氏について、「春陽堂月報」一九三一年二月)、この多分に戯画化された文壇付近に生息する青年たちの姿は、井伏自身の自虐を含んだ自画像にほかなるまい。

すなわち、井伏自身を振り返ってみれば、文学という「神」の発見はあったけれども、「神」の内実は何を盛るべきかを失念していたといふべきであらう。先に、前世代からは「文学」への信仰を遺産として受け継いだ、と述べたのはこのことである。榎林滉二が作品「山椒魚」を捉えて、山椒魚の閉じ込められた窟とは文学の謂に他ならなかつたと指摘するのも、その意味で頷けるのである(4)。あるいは、作品「鯉」において、△鯉▽が、青木南八が友情を込めた最大の贈物であると同時に、△私▽に心の負担を強いる代物だという、正負の両義的な意味を持って形象化されていることを想起して、△鯉▽に南八から与えられた文学という贈物の象徴的な意味を読みとつてもよい(5)。

芸術に向かうスタイルに賭けることは、芸術への信仰によって自己の特権化できた大正私小説作家とその忠実な継承者までは許されても、井伏はそれを自分に許さない。たとえば萬西善蔵などは、創作を

絶対化すると同時に、その創作に携わる自己をも絶対化した上で、その際に家族を犠牲にすることへの辛さを歌い上げる。井伏の場合には、文学・創作を絶対化・聖化することはあっても、そうした文学に携わる「私」を絶対化するようなことはない。文学は聖別されても、文学に携わる自己は聖別されることはないのである。

その結果、先に触れたように、井伏作品においては、文学青年らしき主人公は、そこに登場する他の作中人物たちと置換可能な存在として造型されることになる。この文学そのものが絶対化されても、文学に携わる「私」が絶対化されないという分裂状態は、文学青年たる自己を描こうにもそこには余りにも貧弱な「私」しか発見させない。すなわち、文学に携わる「私」の姿を書けば事が足りるといった私小説は、井伏には不可能であったと思われる。そうした自己像を描くことを無意味と決め付ければ、一応は作中に文学青年が登場してくるのだが、何ら特権的な場を持たない、行き暮れた姿しか描けなかつたし、また、その自己の姿勢を逆転させて歌い上げるということもできない。とすれば、文学に携わる「私」という存在を無価値であると認めた上で、文学への信仰を維持する方法を井伏は発見しなければならなかつた。もし、ここで、井伏が文学青年としての自己まで否定してしまえば、それこそ、井伏は何者でもなくなる、絶対的な自己否定にまで行き着いてしまうだろう。井伏はそこまでは至らない。在竹小一郎は長男であるがゆえに故郷は迎え入れてくれる（「埋憂記」）が、次男の井伏には帰るべき故郷の家はない。井伏は東京で文学青年を続ける道しか残されてはいないのである。

その井伏にとって残された方法は、「私」の文学への志向を「私」

の物語として作中に描きとめるのではなくて、他者の物語を書きとめる書き手としての自己定位ということであつたのではなからうか。そして、このときに作用したのが、所詮、文学という信仰を取り去ってしまえば、都会に行き暮れる失業青年と何の選ぶところもないという自己相対化の作用である。文学というものへの信仰を生かしつつ、他方、文学に携わる「私」を何ほどの特権的価値を持ち得ない相対的な存在として捉えたときに語るべきは、「私」の物語ではありえない。そこに浮上してくるのは、「私」というものに捉われた存在ではなく、そういうものを無化して生きている存在である。自らの個の特権化を退けた井伏において、当然、そこに捉えられて来る他者も、語られべき内面を持った、突出した個性ではありえない。

では、そのとき井伏は完全に「私」というものを消し去つたかというところではない。井伏の作品の中で、語り手あるいは書き手たる「私」が、物語そのものから放逐されることは希である。たとえ作品内世界の物語進行に直接に関与する機能は奪われても、「狂言回し」とか「語り手」とかいわれる「私」が、井伏作品に登場する。だが、この「私」は「私」の物語を語るために設定されているのではない。「私」を徹底して相対化するために用意されたものである。「私」の特権化を排除した井伏は、「私」の言説をもその特権の外に放逐するのである。井伏は、「私」の語る物語という体裁を採ることによって、作品世界を相対的な価値軸の中に放り込んでしまうという荒技を見せる。

一般的に言い直せば、厳密な意味において客観的な言説などはないし、そこには語り手もしくは書き手の偏差を通してしか語ると

か書くとかいった行為は不可能であるとの認識——これが「私」という語り手を登場させる。すなわち、「狂言回し」・「語り手」として指摘される「私」が作中に登場して、作品内世界と読者との間に介在し、かつ、その「私」が語る物語は、「私」の語りの支配下に置かれていくということを読者に意識させるのである(6)。そこに働いているのは、語ること・書くことに対する繊細な自意識である。通常、大正私小説(心境小説)においては、「私」の支配下にある言説であっても、それを相対化して捉えさせる作用は排除され、「私」の絶対権力の下に読者は服従することを強いられる。語り手は、いわば無私の絶対性を獲得しているのである。ところが、井伏作品においては、そこに完全に無化されない「私」が紛れもなく介在してくる。このことによつて、「私」の言説は相対的世界に置かれ、そこに繰り広げられる言説全体の相対性を指示することになる。このようにして、井伏は、小説の語り方においても、自己の特権化を排除した上で、物語を語るのである。

さて、このような意味で、「朽助のある谷間」(一九二九年三月)において、文学青年の敗北が描かれたことは象徴的であるといわなければならぬ(7)。この作品においては、文学青年なるものの無内容な生活ぶりの記述から、さらに進んで、その敗北に至る道筋が描かれる。また、「一匹きの蜜蜂」(『新文学準備倶楽部』二号・一九二九年七月)は、文学青年が故郷の家産を食い潰してゆく話である。もはや文学青年という存在の胡散臭さがはっきりと見て取れる。そして、やがて、作品内から文学青年の姿は放逐される。しかし、この時に問題にすべきは、作中における文学青年の敗北やその放逐が、必ずしも、作品を

書くという文学的営為の敗北を意味しないことである。

### 三

井伏の数少ない自己の文学的態度を語ったエッセイに、大きく影を落としているのはプロレタリア文学である。そこでは、プロレタリア文学に対する距離の取り方に微妙な変化が見られ、その変化は、おのずから井伏の文学的自己定位の足跡と対応しているようだ。プロレタリア文学を座標軸に設定し、それとの位置関係を確認してみれば、井伏の文学的姿勢を固めて行った道程がより鮮明になるように私には思われるし、また、井伏自身もそうした中で自己の文学的位置の確認作業をなしたように考えられる。

プロレタリア文学に関わる可能性のある最も早い井伏の言及としては、『陣痛時代』同人たちを左傾に導いた早川郁緒(8)が、『陣痛時代』に発表した作品「善良社会のW・C」を激賞することばを挙げるべきであるかもしれない。それは、「能勢と早川」(一九二七年六月)「田園、電車等」(一九二七年七月)といった『桂月』に掲載された文章に読まれるのだが、現在のところ早川郁緒の作品に直接当たることが出来ないで、これについてはひとまず置いておきたい。とすると、現在のところ、プロレタリア文学との関係において井伏の文学的態度が窺える最初の文章は、井伏が『文芸都市』に参加したのと同じ一九二八年二月(9)に、『福岡日日新聞』朝刊月曜付録に発表した「或る統計」(一九二八年二月一三日・二〇日)ということになる(10)。この「或る統計」は、文中に「私は世の人心の動き行く有様を仔細に述べ」とあ

るように、左傾が極めて一般的になったという一種の状況論である。そこで、井伏は大略次のように言う―「東京府下には六万五千人の文学青年が住んでゐる」というが、この転換期にあつてはプロレタリア文学へ向かうのが大半の趨勢である。文学青年たちはプロレタリア文学に向かう立場と、「貧乏も不遇も、こゝまで来れば返つて明るいぞ」と叫ぶ立場とに二分されているように見える。だが、後者の立場を強調し理論化したのがプロレタリア文学であり、後者もやがては前者の方に流れ込んで行くべきものであつて、それが現在の「世情時勢」である。―このように井伏はプロレタリア文学へ傾斜してゆく「文学青年」の動向を歴史的必然であるかのごとくに展望する。左傾が必然的な道筋である「世情時勢」だと言ふのだから、このような論理だけを追つてゆけば、プロレタリア文学側に立っているかのような印象すら生じる。しかし、東京府下に文学青年が六万五千人もいるという統計を出したり、あるいは、ある大衆文学作家の大正一四年の作品と昭和二年の作品を比較してマルクシズムへの傾斜を調査したという「統計学者」や、「某文学青年の会合」において三時間二〇分ほどの対座の間にマルクスという言葉が六二〇回も繰り返されたと報告する「統計学者」を登場させたりするのだから、時代に乗り遅れまいとして左翼に走る文学青年たちを、相当に戯画化・揶揄したものと読むべきである。しかし、左傾全盛の状況に対しては、このような戯画化という方法しか採ることのできない井伏に、プロレタリア文学に対抗しうる十分な理論的留意がなかつたことは改めていうまでもない。そういう限界があるがゆえに、戯画という迂遠な方法でしかプロレタリア文学を批判できなかつたし、表面の理筋としては左傾必然の「世情時勢」に、

「さもあるべき世情時勢でこそあれ、人々は斯くあらなければならぬ」のではないかと思ふものである」と一応是認するかのような状況論を述べてしまつてゐるのである。が、そうした限界を最もよく知つていたのは井伏その人にほかならぬだろう。だから、井伏は、婉曲な物言ひの中に、左傾必然の「時勢」に乗らない「少数の文学青年」が存在するという「事実」を指摘することによつて、自らの文学的態度をこつそり表明している。雪崩を打つて左傾する多数の「文学青年」が存在する事実と同時に、左傾を肯じない「少数の文学青年」が存在する事実を指摘することは、いずれも、現象記述という次元にあるわけだ、そこにおいては、理論の用意も釈明も必要とはしない。そのゆえに、井伏は自身の態度をそこに表明できたといえよう。井伏は次のように述べてゐる。

それ等(一種の)芸術運動から自らを除して他の少数の青年は或は、自己の忍従によつて五十幾歳の文学青年となり得ることもあらうが、それ等の運動から自らを除しなかつたところの多数の闘志と共に戦つてゐる一般民衆を裏切れることは、遂になし得ないであらう。

引用冒頭の「それ等(一種の)芸術運動」とはプロレタリア文学運動を指している。なぜ、その「少数の文学青年」がプロレタリア文学運動に加わらないのかとか、あるいは、「自己の忍従」を支えるものは何なのかといった次元の問題に井伏は立ち入らない。ただ、そういう「少数の文学青年」がいると言ふだけである。左傾必然の時勢を説くにもかかわらず、それを皮肉る井伏が、「自己の忍従によつて五十幾歳の文学青年となり得る」道を選ぶ「少数の青年」に自らを擬してい

るの明らかだろう。

しかし、注意しておきたいのは、「闘志と共に戦つてゐる一般民衆を裏切ること、遂になし得ない」という、プロレタリア文学運動に加わらなくとも、かれらが救い出そうとしている「一般民衆」は裏切らないという倫理的告白がなされていることである。とすると、「或る統計」に示された井伏の基本姿勢は、プロレタリア文学運動の担い手が示した「一般民衆」に対する倫理に共感しながらも、慌ててプロレタリア文学に接近しようとする人々とは一線を画そうとするものであった、といつてよいだろう。井伏は、こうした基本姿勢をほぼ一年半の間保ち続ける。ただ、この一年半程の間に変化があるとすれば、倫理的課題と芸術的達成との区分けを一層強めて、作家としてはプロレタリア文学運動並びにその実作を明瞭に否定するようになる点である。たとえば「鯨二への手紙」(一九二八年一〇月)で時代便乗とでもいふべき軽薄な左傾を批判した井伏は、翌一九二九年の「散文芸術と誤れる近代性」(一九二九年四月)においては、

時代の先端に潜む矛盾に対し、経済学理論に照して批判を加へた点に於て、コンミニスト達は正しかつた。けれど彼等の仕事の結果は、今日までに幾人の頑強な闘士を出したかといふ計數に終始する。何故かといふに彼等の理論が散文形式によつて示されたところによると、既成美学の黙殺、そして頑強なる闘士となれ！ 彼等はこれ以外のものを示しはしなかつた。(勇壯極まる文案のポスターであつたのだ。

と社会運動としてのマルキシズムを肯定する態度を示しつつ、プロレタリア文学運動における文学的成果に対して全面否定のことは綴つ

ている。

少なくとも先の「或る統計」では、「ある大衆作家」が、「マルクス主義的思想」を書き込んだことには「愚劣なる作家の媚びに他ならぬであらう」と述べて、時代風潮への軽薄な便乗は切り捨てはしても、プロレタリア文学の実作そのものを否定することは見られなかった。ところが、ここに至ると、プロレタリア文学の実作を芸術的に認めない態度が表明されるのである。

もちろん、「文学における社会性」の必要や、時代の矛盾に苦しめられる人間が「うちのめされ或は屈從する」姿や、「その矛盾に対抗し反逆しようとする潑刺たる意欲」(以上、「散文芸術と誤れる近代性」)こそを描くべきだと主張する井伏と、社会矛盾を糾弾しようとするプロレタリア文学の主張との間には、いうほどの隔たりはない。その意味では、プロレタリア文学運動の社会的矛盾に対する倫理的・理論的側面までも井伏は否定はしていない。

プロレタリア文学に関わる井伏の姿勢が大きく転換するのは一九二九年後半のことに属する。この時期、「理論」(一九二九年六月)、「巻頭言(なつかしき現実)」(一九二九年八月)、「アンコンシヤスネスの魅力」(一九二九年九月)などが相次いで現われる。否定するにせよ肯定するにせよ、これまでは、プロレタリア文学という軸を拉致してきていた井伏は、これらのエッセイにおいては、プロレタリア文学に寄り掛からないで自己の文学的課題について語り始める。この事実、プロレタリア文学に対する反措定という形式でしか自己の文学的課題を語れなかつた井伏が、そうした否定の対象を持ち出さなくても、それなりに自己の文学的課題について語れるようになったことを意味し



ている。ただし、繰り返すことになるが、井伏がプロレタリア文学の芸術的成果を否定したにしても、マルキシズム運動やプロレタリア文学運動を動かしていた倫理的課題までも否定していないことには留意しておきたい。

#### 四

この時期の井伏の文学理念を語ったものは、理論によって「現実」(あるいは「真実」)を裁断することを避け、「現実」に即けということ主張しているようだ。そこでは、比喩的に「現実」について語っているので明瞭には分かりにくいだが、繰り返されるテーマは、動きようのない「現実」に対して、作家としていかに関わるかということである。「巻頭言(なつかしき現実)」では、「不公平を黙認し且つ気まぐれであるといふ性分」を持つ「現実」に、文学の上でいかに対処するかということの問題にして、

私は彼女「「現実」の意―前田注」のよくない仕打ちを仔細に記録して、潜<sup>ひそ</sup>越ながら彼女の反省をうながしたいと思ふ。そしてその記録の合間々々には、彼女の幼などきの素直さを思ひ出させるラツパを吹きたい。

と述べる。そして、そのような現実に対する態度がどうして採られたかという点、

私は極力彼女「「現実」の意―前田注」をなだめようと努力した、また彼女に愚蒙たる風貌を装つてはいけなくと忠告してみた。すでに私は私自身の微力であることに気がついてゐたが

今にして思へば汗顔至極なうたをうたつて、彼女を素直な性質にしようとするのみたのである。

という。すなわち、「なだめる」とか「忠告する」とかいった「現実」に対する直接的・能動的な関わり方に失敗したがゆえに、先に引用したような「記録」という、直接には対処せず、一步身を引いた態度を採ろうというのである。

これらの幾つかの舌足らずに理論を語った文章で注目されるのは、現実に対する作家井伏の姿勢が受動的であることだ。何かに向かつて現実を改変しようとするような要素には乏しく、この「よくない仕打ちを仔細に記録して」「反省をうながしたい」という。ここでは、動かしようのない「現実」に対して、それを記録するという受動的な方向に進もうとしている、といえよう。

しかし、このことが、文学的な次元においては、必ずしも受動的・消極的な姿勢を意味しないことを忘れてはならない。確かに現実の社会問題や社会矛盾に対する姿勢としてはそうした非難は当たっている。が、それらは現実の政治の次元で解決されるべき問題であって、その解決を文学の次元に求めてはならないだろう。政治問題を文学の次元で性急に解決しようとしたのがプロレタリア文学であるならば、井伏は、作家として「現実のよくない仕打ちを仔細に記録」するという地点にまで後退することによって、逆に、そうしたプロレタリア文学の限界を越えようとしたといつてよい。プロレタリア文学が現実と直接働き掛けようとした文学運動であったとすれば、こうした井伏の自己批判のことは、実は、プロレタリア文学に接近していたことの自覚の上に発せられたようにも考えられるのである。

プロレタリア文学の倫理的課題を井伏は否定はしていないし、また、自己の文学的出発を語るときに、プロレタリア文学との関係の中で語ろうとする井伏においては、単に時代的にプロレタリア文学台頭期と文学的出発を同じくしたというのみにとはとどまらないで、その倫理的側面において共通するものを持つていたのではあるまいか。だから、 $\wedge$ 現実を記録する $\vee$ という文学的態度は、理論・観念を先行させたプロレタリア文学の方法を否定した上で出てきたように考えられるのである。

以上に見てきたように、語るべき過剰な「私」が井伏の内部にあつたのではない。そこにあつたのは、何ら特権化されえない空洞を抱えた「私」だ。プロレタリア文学を支えた昭和前期のマルキシズム運動とは、一面においては、青年たちの抱えた空虚や不安をマルキシズムという概念装置によって救い出すものであつた。その概念装置が一個の人間の内部で自動運動を始めてしまったとき、マルキシズムに憑依された「私」の観念的な自我拡大運動という側面を否定しきれないし、また、プロレタリア文学もその延長上にあるとすれば、「私」を徹底的に相対化しようとした井伏がそれに同調できるはずはない。加えて、先に述べたように、「文学」という別の神を継承した井伏はあくまで文学の領域にとどまろうとしていた。

「文学」という神への信仰を持ちながら「私」の内部の空洞を自覚した井伏は、このようにしてプロレタリア文学やプロレタリア文学運動とは一線を引きながらも、しかし、プロレタリア文学の倫理的要求をかれなりの方法で組み込んで、そこからは一步後退したところに自己の文学的位置を定めたのである。

注(1) 井伏は実兄の薦めで作家になるべく早稲田へ行ったということであるし、井伏が伝えるのは、「誰も彼もが文学のことを語り、芝居のことを語り、生活難のことなど誰が饒舌るものではなかつた。こんな面白いことがまたとあるものではない。」（『青木南八』、『文芸都市』一九二八年五月）といったように、「文学」を絶対的価値とするような早稲田の雰囲気である。

(2) 和田利夫「井伏鱒二『鯉』の成立と背景」（『日本文学』二四卷一号・一九七五年一月）によれば、『桂月』は一九二五年一月の創刊で、一九二七年一〇月の二巻一〇号まで確認とのこと。

(3) 東郷克美「『くつたく』した『夜更け』の物語―初期井伏鱒二について―」（『成城国文学論集』一三輯・一九八一年三月）。

(4) 榎林澁二「山椒魚」（『国語展望』別冊三二現代国語研究シリーズ一「井伏鱒二」一九八一年五月。のち、『井伏鱒二研究』深水社・一九八四年七月に再録）。

(5) 東郷克美「井伏鱒二の $\wedge$ 方法 $\vee$ ―『山椒魚』と『鯉』の形成―」（『国語展望』別冊三二現代国語研究シリーズ一「井伏鱒二」一九八一年五月）、拙稿「『鯉』異説―変容する $\wedge$ 鯉 $\vee$ ―」（『兵庫教育近代文学雑誌』二号・一九九一年一月）。

(6) 磯貝英夫「近代文学に於ける笑の定着―井伏鱒二をめぐって―」（『日本文学研究』一一号・一九五〇年四月。初出未見。のち、『昭和文学作家研究』柳原書店・一九五五年五月、『井伏鱒二・深沢七郎』日本文学研究資料叢書・有精堂・一九七七年一月に再録）には、「現実と（それが絵空事であってもこの場合問題ではない。）表現との間に意識した距離がおかれているのが井伏の文章の特徴

である。(略)そしてこの滑稽が、単純な原理の上に立ちながら、なかなか複雑なニュアンスを帯びてくるのは、作者がこの距離に意識的であり、そして、作者が意識的であることを読者がまた意識するという二重の関係によっている。」との指摘がすでにある。

- (7) 松本武夫「井伏鱒二『朽助のゐる谷間』論」(『井伏鱒二研究』明治書院・一九九〇年三月)、拙稿「『私』の行方―『朽助のゐる谷間』一側面―」(『言語表現の研究と教育』三省堂・一九九一年三月)。

- (8) 「昭和十年代を聞く」(第二次『文学的立場』二号・一九七〇年九月。のち、文学的立場編『文学・昭和十年代を聞く』勁草書房・一九七六年一〇月に再録)。

- (9) 井伏は、末尾に二月二日の日付が記された、『文芸都市』一卷二号(一九二八年三月号)掲載の座談会「新人倶楽部合評会―文芸都市其の他に就いて―」に参加している。

- (10) 佐藤嗣男によって『福岡日日新聞』に掲載された井伏文が紹介されている(「井伏文学、初期の相貌―資料『散文芸術と誤れる近代性』を中心に―」『日本文学』二九卷一〇号・一九八〇年一〇月)が、石田忠彦「『福岡日日新聞』文学関係記事一覽(昭和編)」(『近代文学考』五号・一九七六年一月)によって調査すると、佐藤嗣男の紹介した作品以外に、井伏は、本文に取り上げた「或る統計」や、「公有劇場の設立」(一九二八年六月四日・一日)、「疑似女性相談」(一九三二年一月二日)ほかを発表している。